



富山銀行賞

世界中の人と心を通わせられる未来

射水市立大門小学校5年

長澤 美歩

「Choose one.」 「This one.」 私のつたない英語が通じた時、素直にうれしかった。

私は、北京で開催された日中韓の子供交流事業に参加した。出発前は、家族と離れて過ごす不安、初めての海外への緊張、そして万里の長城を訪れる期待が入り混じっていた。現地では、中国人と韓国人の三人部屋での生活だった。最初に直面したのは、予想していた通り言葉の壁だった。韓国の子が中国語を話せたため、二人はすぐに打ち解け、私は孤独を感じた。心細さに押しつぶされそうになり、涙ながらに家族に電話をした。画面越しの家族の笑顔や励ましのおかげで、「せっかくのこのチャンスを楽しもう」と前向きな気持ちを少しずつ取り戻すことができた。

その後は、翻訳アプリを使いながら、英語やジェスチャーを交えて、自分の気持ちを伝える努力をした。最初は思うように伝わらない場面も多かったが、相手が笑顔で応えてくれると、もっと伝えたい、知りたいと思うようになった。言葉が完全に通じなくても、ちょっとした出来事で自然に笑い合えるようになり、毎日が楽しくなっていた。文化や言語が違ってても、お互いが理解しようという気持ちがあれば、心は通じ合えると実感した。

この北京での経験は、私の視野を広げ、私自身を大きく成長させてくれた。言葉はイントネーションや表情で意味を変える。翻訳アプリを通じた言葉ではなく、自分の言葉で、相手の目を見て思いを伝えたい。だから私は、これから英語をはじめ、さまざまな言語を学ぶ努力を続けたい。帰国後は、街で目にする英語表記や、ショッピングモールで流れるアナウンスに自然と目や耳が向くようになった。「千里の道も一歩から」小さな一歩を積み重ね、いつか世界中の人々と心を通わせられるようになりたい。それが、今の私の夢である。